安政文鑑

六之七

へ 5
4709
4

へ5
4709
4

本朝文鑑第六

序跋類

其代序　忠心百句序　一居序　觀音懇座序

業合序　千句跋　鴉鵲集跋

對句類

花鳥對　影法師對

昭和九年三月廿日
中田勇氏
喜男氏
鈴氏寄贈

序跋類

其袋序　　嵐雪

ちよくれして天の袋ありあらゆるものを入物あり今
おもてうらは父母の恩なる事を知てよりこそ其は
進みれておもをうしおこりて袋のかたちさやかに見えて文字ぞ
て序あり袋のひもをも解て家にもてあそびさされて雁袋に
は浦浦の名をもめづらかにありて袖をはきありされば武さし
の中の袋ありて織て出る袋なり肩にかけて縫に入てかゝ
ふる物を入てるにや謡のかゝりともや春山霞月雪笑
を裏てありし其の袋は光陰のひもをほどき袋かとれし

やわらかなる為富思が袋とかゆめんとされば息らくなりて
むかし家に其袋やむかしの末なる月のかたをとうか
ひろひくるを浮かぶて我がくの縁底袋を兵とすみ
捨てもかゆるところて元禄こゝ巳の文年のみな月に
嵐雪こゝろに序をて

按云此ニ序ハ比ニシテ賦ノ体ナリ去レハ誹袋ノ二字ヲ以テ
俳諧ノ名ヲ指ヲ成セルヨリ和漢ニ毀誉許ノ袋ヲ云ヘル誠ニ
詩歌連俳ノミナラシヤ結語ハ秘蔵ノ二字ヲ置テ蘭ト
梅トノ虚誑ナル例ニ文章ノ虚実ヲ傳ヘテ武城ニ其角
嵐雪アリトハ蕉門ノ人ノ常語ナルヲヤ

東山百句序

山本堂

[illegible]

[illegible]

武藤の家人[illegible]

往古北庁ハ柳よりハ庵ノ文庫ノ書類ノ中ニ封紙ありて遺
サレシカ今ハ選ミテ序ノ一ツヲ加フ去レハ故翁ノ七日ハ十月
十二日なれハ対師ハ總テ二月ニ法要セリ但し東西ノ門跡ニ
遠ニ高ラ勉メ入ル例ナリトフ此時ハ天下ノ門弟ヲ催シ洛陽
常匠ヲ請シテ二日ノ法會ヲ成セルニ善鶏ニ指遣行上人
ノ句ヲ乞イ巻軸ハ武陵ノ風雪ニシテ其ハ序ハ今ノ書堂
ヨリ此巻ハ但し山口氏ニシテ故翁ト文章ノ交ヲトフ

卜居序

白鷺居士

家を近衛法門二条に卜して端午のまとりの
てうしんとしあたひあるよ酒肴を筐とてあるいとのう
ちの四つかてこれをもて自己の智能とすめとて先ちの所
いよ作ひあるんを云ふとなを所のうひてをの〻羅而と
負ひふる〻鍋とそ〻ぐ他間とおもあるく他遠の中に
羅人ありてはたのかをりをあつ山雀を鼎の中
に煮ることれ酒の人々雀の四つ乾坤とをれ
他を他人を造作をるれをの者とをるとあるん

ほを濃れの害あり湘南に和て濃濃して古老西なれ
名をとれ四つを捧ぐ時に盤をとひをるあり時に
和を庵とふををもをの方に智能とをのをはんる
世の人は造作をひはんうをの和をやををををを
人を尾とをををるあれをを年を金塔を竹庵と
むをひて実の和を庵をいをるを〻ひれに擂を
冬杜冊の一章とをて机をひんとを所をを
狂云此序ハ筆張ニカアリテ抑揚自在ノ文章ト称スヘレ
然レハ自己ノ智能ヲ笑ヒ他人ノ造作ヲ誠メテ中間ニ理屈
ノ修行者ヲ形容セル隠倫ノ身ヲ置ニ所ナカラン歟等ノ禅録

ノ指示トスル誠ニ此老ハ故翁ノ同雅ニ基ヒテ十里ノ候盍ニ明ル
ノ動カリヲ成セルヲ言ヒモ我師ノ荷擔人ナル姓ハ生駒氏ニシテ
自ラ白駒居士ト称ス但シ其此ノ名ハ百子トモ云リ

觀音遷座記

東花坊

花ヲ〻ニ立ル所の観世音ハむかし花山院の御ときに法
ゐ世ゝ〻なのゝ名を呼ばゝ〻てそと西国巡れるに
あり始て那智の原に頑なる世のゝ人とはかり
孤て宮殿のれに妙覚冥闇の月とをかむなの
向ゝ三十一番と称ゝ法ゐれと一いをあらゝ三ゐ

三いをふらゝ一ゐて感ゐ言ゝ應ゐれゝ
ゝ況ゐそと万水一月ゝゝをゝて仏薩埵のおかゝ
不ゐゝゝ月乃場ゝゝふゐゝ一或ゐくよゐゐちゐの
胴とはゝ行感ゐよ昭ゝ法めゝゝ内とかゝゐゐて或
三面十一面あゝ馬頭軍荼ハ呉相と称て魔界
ゝ命彼のゐゝと志ゝ如意輪の係の頼ゐゝ何とゐ
ゐちゝとゝいゐゐふや衆生海会の愚惟とゐゝかく
ゝふゐゝゐゐゐゐふゐ世ゝ西欲ゐゝ内ゐゐ
のゐゐゐゐて邪正のゐゐひゐゐゐて空假中のゐの中
ゝゝゐゐふや権實のゐの間ゝあゐれゐふや人ゐ

てるましむ一字つゝも或は聖く唱ふるものゝ利して
まうで来るも百千のかたちとなりて百千の衆生をこち
ひを施へハ観自在菩薩とし圓通大士とし補陀
ならびけ娑婆界にては大士の願をさらのぞて世にはふ
事は頭人もなき不信不敬の人とさへ遠からぬ縁
はくてもおもるへきと大士の霊験ありければ越の中洲の
石動の観音寺はむかしより大悲の霊場なるが新に三十
三所を造立してむかしの西国かくやとも老人
婦女の遠境の労をとゞめてまゐらす鬟齋女稚独の
貧窮の悔しからんために諸国の霊を一堂にあつむる

せし一念は三十三念の掌と合せて作す事去此不遠の
極楽浄土にて候

衲云此序ハ文章ノ要地ナカラ其名ヲ配スニ奇法アリト云
ヘシ去ハ観音ノ娑婆ヲ領シ玉フハむも摂厳ノ所説ニシテ其余
ノ詞モ諸経ヲ摘採セリ寛ニ石動（文峯）ノ観音寺ハ現住ノ僧ノ
風雅ヨリ三十三番仙ヲ奉納シテ其レニ此序ヲ乞ケルトゾ但シ
今ノ石動ハ倶利迦羅ノ山ノ麓ナリ

葉合ノ序　　蓮二房

ひとし夏の例ならねど葉をそまみる人世にやねなりて

あら雛むかしくにおもきにかれ南山とのつゞきもあれハかくる
そよりく人向のむ藤によりて牡丹ときこし菖蒲など
あゝして是にねむの義とあつまるに和漢人情の
けねなるへしけて我朝の一戸薬をとゝ菓とえらびたれ
もとし光とられし菅皇か楚辞にはとゑらびたるものに
あつて吾人をて菓のちよとうらふよ詩人をむかし仮遠に
それかふなよりけれそ吾が山に吟ていつるまゝなるへき
なの名ちぶるとや云ふると寛これの頃しかより東海に
けひとりてあらはひて玉雛金瑞の恵とかへたれ金蔵
細締の日とおぼえふせその價は牡丹にありたひて一かも

の葉枝とかゝりえけれハ実にハ價のたかきかれもふ
才一るハ決濃の色とそくに才二るハ毫釐のすと
あつかふ大なるは天まも及ひて菓子して菓のにあり
さるおもおもしむかしそ和漢名高き雪のなより金績
銀績ハそのふとなそて小金やみゝの紀色ちん鸞鷺
のあかれよけひるしと今々そみのなのたるのをなる
赤好界とらひ金山あてらひ金鳳銀鳳の名に
至るまでむかしのちつはよいかへしそるん雛のこともまくより
けし派までゆくなれりてあそふへきき因よ何も浩法
村雨を寛永の末まよりひとつて小手巻事ね軍ハ両性の

[illegible]ちにみありきて[illegible]京の事[illegible]
こんさるわあさくちん[illegible]神はやいの国[illegible]
[illegible]して構の[illegible]の稲むあるこ[illegible]尾張[illegible]
あり[illegible]天[illegible]仏[illegible]ありて[illegible]
[illegible]のんとかとふる[illegible]大[illegible]月下[illegible]
もゆりく[illegible]
て伊冊[illegible]花麒麟の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よのたれぬれてやむの大あんとかちきて毛[illegible]
のふよやうあれとも角てい[illegible]
辻とい[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ロ北重ふるといふあらん或ハ蝶思ひつ阿蒙佛爾し右将虎将
のなとあらへいる衣通ちむの辭とありて近人鑑大和撰
まてふはらいはねの葉をあらみにん又ハ古もと人思陵と
てはむまはるゝしみきる所あらん陽暮しき年の去年
文やまらんと人のさしけりきくひるあって葉るふ代
のさかりしるをさそなりしかれ

祀云此序ハ越ノ作家ア佳書ニ葉十吾仙ノ二序ナリシラ廿選ニ
下四各セり去レハ此篇ハ知己ノ二子ヨリ起リテ人間ノ貧福ニ
喩ヘタルア繞ニ花影ノ欄干ヨリ朱四臣ア富田史ニ結文
セり或ハ麒麟ノ名ヲムステ国々ノ花ノ仕舞ヲ云ヘル絶字

ノ二子ハ神アリト称スヘシ或ハ左ニ金翅鳥アリ右ニ此名金竜アリ
ト云イテ朱雀門ノ下ニ二葉ノ字ヲ置タル是ヲ錦辭ノ文法
ニシテ禁門ノ名ノ響ニモ紛レサラン然ルヲ結語ニモ人ノ要
ヲ忘レス二葉ニハ当時ノ寿ヲ祝シタル篇中ノ深衣ハ文外ニ知ルヘシ

千句ノ跋

荒木田守武

何て誹諧してみてりわかし笑ひをむすとはなりいりむ
む室とたて之風雅ありて志も一句きらしくはなとかし
くあらんやと世しれ好士のとしへありけするれそれ
とそよらさてとくみをしきさ神会そうりに長扶と

三句むすびさる所もあるべし作者は正風を旅人の耳も
入やすきに御も有んはその筆なんかなしと拙者
のおかれたるふしもあらはれ文字の附よろしきや
またそなはさむも雅びやかにする俳諧にねがはれ
ふよあしあしきと好するかくの言葉なれし所なき
世の事されなかりけんやなれん連歌よ云ふかへける
古今なりんかけると宗鑑のこのしもあんてのひ俳諧なる
とて長にはなるかなくとて得し座るからかわよまる
なとをいたいすて入よ一りしとまより宗祇には加へりの
有識人入れの徒を勝よ作し宗祇よりなひく

発句なしくてもり近く宗牧の二三みちもあれかしく
それらとをかりて用ひるなれはなりや

紀云此説ハ伊勢ノ人々ノ書傳ヘテ竟ニ烏焉ノ誤リヲ
多カラン今ハ始終ノ文ヲ擇テ刈テ中間ニ俳諧ノ規ハ範記
抜ラ出セリ兼載以下ノ奇言怪語ハ總テ其ハ代ハ俳諧
ノ詞ト知ルベシ然ルヲ俳諧ノ盛リナラテ定ラシテハ一句
多シク然モ可笑シクアランヤラニトハ俳諧ニ百世ノ掟ニシテ
何ニカ又ツレナラサラントハ儒仏ノ道ヲモ顛倒セル神家ノ人
ノ俗語ナラン但シ作者ハ荒木田ノ長官ニシテ其ハ比ニハ
守武翁モ一ナト世ノ俳諧ノ先祖タラン

帰鴉住ノ跋

蓮二房

此一巻ハ閑如老人の老とあくにたるよりたのしみ
序ゝ帰鴉のうゝとつひに跋ゝ四序の春色と
いつるゝ色てらたの秋のこゝろある一ツ春ハ草
の春ゝゝそるの春ハ梅柳ゝ山吹
ちくゝゝたのいつくもあるて花冊に春の遊ゝこゝ
八十年の老ハ春に春ゝ一ツ春ゝ衣の多和ゝて
これたのかゝれおりゝくけるゝたわゝとこひちゝ
むゝゝゝゝれのゝきれゝゝむゝゝのゝゝゝゝれゝ

秋ゝ初秋のゝ月ハやうに三日月のゆゝたゝゝゝゝゝ七夕
まつゝ魂ゝたゝゝ二おのあゝれゝゝゝゝ
れの帰てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
廉もゝゝゝ秋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋月の老とゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
姫ひゝきのゝもあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝれ初ゝのゝゝゝ九月の梅ゝゝゝゝゝ
たのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の春のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれ炉掃の氏の遊ゝあれゝ解ゝのれ帰ゝ

ありて玉〜数と人〜さかれてちりぢるのまとも
まれんとてありて深き年くの老を言へ
犯云北殿ノ専用ハ四季ノ名目ヲ配ルニ如アリ誠ニ季ノ
文法ハ北殿ニモ数多チカラ何レモ一体ノ差別アリテ其等ヲ
文鑑ノ文鑑ト見ルベシ去ニハヤ四序ニ年ニ忘ノ二字ヲ置テ
春ニハ今年ノ老ト云イ夏ニハ昔シノ老ト云イテ秋ニハ老ヲ
ニ忘ニスト云ル裏老ノ歌ハ北所ニシテ前ノ事類ニモ見ヲ云リ
冬ニハ焼火ノ更ナルニ水泡ノ句ノ如絶ル爐炉ノ対ノ親切ナル説ヤ
春待ノニまラ以テ二年々ノ老ト云イナセル七縦ハ猛ノ自在
ヲ称スベシ但シ此老ハ農ノ二輪山ニ住ス先師ト所縁ノ来つ

對問類

花鳥對

東花坊

渡部和歌ハ世ニ天地あり陰陽あり男女あり君臣ハ
義のおもおもにしるし父子ハ恩のあれおもにしるし夫婦ハ情の
ねんごろにしるして書てひとしきりに呼ばれて伝
ねそふのいひふんまうふ和歌のむしるもむしるもし
行て咲ても咲ても咲ても咲ても花も散ても
散てもまた散たのみとみふりくるし初ても
さしさしとしとしとも月のあらしるやはれても雲の
花鳥ニ称ス所ニ咲て散ても仲のむに咲るの花と

ちりぬる秋のむらさきの花のいろんみのるころの花のいろんこの事よ
ろこばしく秋をあれしるあるてのひとをきくあるにみてを
筆のむとかけ鶏のまねて秋水のむらさきつゆあれ詩人
い早晩の梅と詠して雪をうたそも咲をしやうをうたいの森を
のふとをうして園をうたもはるあるをうたをと詩奇
連珠と花鳥のこまとをつあるれいまをうれやはるのふ
とはるをうたる秋のあるは月はをとをうへ筆の梅と
はるの情を写して秋北事の賀親とはるをうへ
安芒坊對ふはれを陰陽の兩儀より五偏をつあるを呼
はるをてをれをうまのかをうれはるをうをとやをうけて

天子ちんのひるをうあるを支婦を姿のなるにはをうの
をれをうあるのひるをのをかはるをうちんのむるんをやはれを
君主の雎鳩い詩抵の用南をあるをうれをうんのむるをうを
れを秋水の鶏鳴い八雲の俳句をうをうれて詩をのむる
をあるをうをうをやかをうを詩のむやはるをうをうを奇の
をるもはんをして昆虫(ハラカラ)の赤をうをして婦をむをうをうい
い姉をうをうをいはるんや朋友をうんをうを一樹の陰をう雲の
をのむをうをるんをうへ心のをうをもつあるをはるをうはるをを
写をの恨をあるをうをつをの恨をうをかをうはるんををくあるを
をるの女の野の写をうをるかの月をはるむくあるの月をを

ゆたかの事をよろこびて宮のうしろにまゐるといふはうあるいは宮のさきにも梅のむめるをみるとてをとこもんやをるれをるあとをもはるさんやたちらをのむの冥鬼（ホトヽギス）を祈るの人のうんをあやまれとまをも霞實とをもりるの四をるをもの魂の四をとあるんよをもれる雑国よりむの四をとあるを居士のをもをるよりれん稲よよ花舟をこ国のみるをるを居国の人を詩よをくをくをこ月の色をとをもをや雑朝の人を鐘よかをりてはをまのんとをあるをるれ以や伽陵のむをとをるけて作も笛色ををるとをや蓮よ豊れをまを和漢の情よかるん桐よ風風をを居農の国よあをるをるれ鳥

よ新古の沢あるりて掘よ繋（ツナキ）馬をよ兵衛う浮世掘よいをと廉よおをふを古は眼の拙彩色よかをやくそをより唐掘の風物師を作よ流とをひをれを京風の筆深を筆よ唐よも論ををるをるをのむをあをやをるとむをるをもをるよ物よ好悪の論ありて筆の筆よ鑢の連辛の所ををるを指掘よ野を俳諧の塩梅（シヲバ）とをよ柿よ彩よ京よ姫よ栗よ彩のあをりんをんをんよりて作よ芹のあをひ新をんをんをりてをの作よ雪のむをををるのんをりをるんいよるをゆよのむにしれをて杉よ府掘のむをるをるをやをれいをの

[illegible]ことなのみとなりてまたかれの嫌も
[illegible]て初の[illegible]れの[illegible]の嵐の歸[illegible]
[illegible]ものなれば[illegible]よられて[illegible]八ちらの[illegible]と行
[illegible]上路の山[illegible]しかくちたくり和[illegible]の浦人[illegible]
やうとて[illegible]のあるのしあんやくんのたちかへ
仍云此類ハ宋玉カ對問ヨリ傳ニハ理平廣世兼ナトノ
身熟松竹ノ對ニ效ヒテ先ハ花鳥ノ二字ヲ題セル本朝
風雅ノ的面ニシテ先向イ先對フヘキ物ナレヤ但シ對問ノ
文法ハ理論ヲ後ニシテ文章ヲ先ニセル委曲ハ首尾ノ題註ニ
在リテ左モ設論ノ虛實ヲ知ルヘシ

夫ハ向有ハ天地陰陽ヨリ君臣父子ノ五倫ヲ云イ其ヨリ詩哥
連俳ニ花鳥ノ姿情ヲ論シタルカ或ハ花モ霊ト[illegible]ニ物語
ノ詞ヲ借ワテ花ニ今宵ハ古ヲノ恩ヲ取リ或ハ秋色自
ニ冬ノ花鳥ト云(キヲノ)啼ト咲トニ歎畧シテ互見法ノ句在ル
ルヘシ或ハ菊ニ[illegible]啼トハ住吉ノ哥ノ詞ナカラ世ノ耳ナレヌ
花鳥ト云イナシ殊ニハ秋冬ヲ錯綜シテ文ニ句讀ノ用ヲモ
知ルヘシ或ハ詩人ニ早咲トハ江南一枝ノ梅ヲ借テ一鳥不鳴雪
滿山ニト云ヘル古詩ノ詞ヲ取合セタルハ花ト鳥トヲ拾ヒ寄セテ
是ヲ一時ノ働ト云ヘシ但シ伐永ノ花鳥トハ行鶯ヲ冬事ナセル
蕉門ニ新式ノ俳ナリ或ハ哥人ニ羅貫トハ二祖四ノ歌ニ寄

セテ千鳥ニハ花ノナキヲ以テ云ヘリ或ハ況海棠林トハ對者ノ胸ノ博達ニ喻ヘテ向者ノ心ノヤ知ラ論セヨトナリ

去レハ對者ハ君文ノ二子ヨリ昆弟明友ノ五偏ニテ強テ姿ノ花鳥ヲ論セス先ハ情ノ花鳥ヲ表スヤヨリ詩ニ連俳ニハ姿情ノ先後ヲ知ルトナリ或ハ雎鳩鴆頭ハ和漢ニ詩ニ音ノ證文ナルニハ雲ノ情ヲ析ヲ詩ニ周南ニ對シテ鴆鴆ノ故ヲ文トハ別々ナリ去レトハ雲ノ情ニ音ハ夫婦同居ノ混ヤナレハ鴆鴆ノ名ニ取合セタル文章ノ自在ヲ称スルヲ文章ノ博達ニ驚レ或ハ詩花ニ音鳥トハ漢文ニハ詩ニ取花濡地トヲ云ヘ條ニ音ニハ初陽毎朝来ト啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩ニ音ヲ合ス

詩任トハ雲トノ結文ナルヲ見ルヘシ或ハ兄弟ノ花鳥ハ屈誰ニ例諸ノ兼格ヲ用イ或ハ朋友ノ花鳥ハ賓地ニ方言ノ語脈ヲ成スヲモ一樹ノ働ヨリ例ニ屈賓ノ兩用ヲ知ルヘシ或ハ梅ニ鶯カトハ勢宮ハ對者ノ詞ナレハ比ヲ屬リテハ讀ヘカラス或ハ野ヲ野坂モ總テ古言ノ詞ナレハ芳野ハ花ノ二字ヲ云イ達坂ハ鳥ノ二字ヲ云ルヲ隠見ノ法ト云ヘシ次ニ春立ノ二字ハ忠峯ヤ言ヨリ杜詩ノ春寒氷雪ヲ含メテ鶯花ノ二字ノ時ニ即チ云ル例ニ和漢ノ博聞ナリ或ハ春モ寂寞トハ雷令長ノ詩ノ蜀魄ヨリ和漢ノ即チ遠ヲ云イテ二鬼ノ雲ルハ知花ノ云イヤケナカラロ異テハ蜀帝ノ怨

意ヲ云リ或ハ柳ヨニ杜冊ノ續キハ杜冊モ春夏ノ意通用アレハ和漢ノ論ノ序ヲ借テ天竺ノ花鳥ヲモ云イナセリ但シ詩ト云イ鎧ト云イテ一年一月ノ意ヲ對セル杜冊ノ上ノ名語ニシテ況ヤ花實ノ筆法ヲヤ然ルヲ蓮ニ水鳥ト云イ伽陵ノ花ノ蓮ニツケテ非衣翠蹈靴ノ詩ヲ今日ノ總テハ花鳥ノ縁語ヨリ總テハ其名ヲ文章ニ配シル總テハ語路ノ新續アル一字一言ノ粉骨ヲ称スシ或ハ擬ニ數本馬ト席ニ紅葉ノ一對ハ先ハ倒將衣ノ格ナカラノ全ク意對ノ奇絶ニシテ累簾モ再ヒ日本ヲ答メテ倭文ニ此等ノ法格アリト信スヘシ然レハ浮世又兵衛ハ大津繪ノ元祖ニ

俳野古法眼ハ彩色繪ノ先達ト云イナセリ或ハ宮樣ニ風トハ仮トニ和漢ノ劇筆ヲ對シテ中間ニ心ノ花鳥ヲ結語セル等ニ文章ノ体ヲ知ルシ或ハ物ニ好悪トハ強テ一篇ノ論ヲ設テ内ニハ連章ノ筆弱ヲ云イ外ニハ俳諧ノ活計ヲ云ル杯ニ鶏モ豆ニ鳩モ例ニ俳諧ノ筆格ナカラ一篇ノ模樣ノ短語ヲ見ル或ハ栗ニ鶉ト云ハ食ヲ求ル類イヨリ花ニ鳥ノ用アルヨリ竹ニ雀ノ無爲ナラシニハト云ニ世法ノカヲ添ヘタル歌ニ文章虚実ナカラニ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ冬ノ繪ト云イナセル何レモ詩ノ詞ヲ借テ冬ノ花鳥ノ風情ヲ附タル此等ハ無心所着ト云シ或ハ亂ニ辭花トハ冬ノ春行宿ニ春ヲ待ツト云ル結前生後ノ

花鳥ニハ年ヨリ正月ノ祝詞ヲ係ヲ亂ヲ嫩ガ君トヒコリ花
一字ハ折節ノ風流ナレン去ハ對向ノ結語ハ古人モ多ク祝詞ヲ
用イテ當代ノ月歳ヲ云リケハ多ニ山姥モ浦人モ總テハ君カ
恵ニナツイテ心ノ花鳥ニ和キタル花實ハ在ノ結文トスレ但シ
此條ハ假名ト眞名トニ屆ケテ柳ヨ庵ノ遺稿ニ留ラレシカ今ハ
眞名ヲ加ヘニ及ハス讀者ハ宜モ通用ヲ請ヒスレ

影法師對　　櫻木園

老の姿鏡の中ヨリ又ヲ
誰何や忽然トヲ
庭ヲ白髮ヲ
と行ヲ汝何人ヲ
庭ヲ彼ヲ白髮ヲ
行ヲ櫻下ヲ
汝ヲ櫻下ヲ
ハの七度ヲ
ヲ何ヲ行ヲ
七度ヲ
何ヲ行ヲ
社家ヲ
の掬ヲ
左巴ヲ

さり所やうく所ゝと書て四一論に勝れらんと賀茂
ゝ云るやうの不詮とて居て宵あるゝを妄議と
あゝせるやうにやいつや陰士の憂思に世間の行家とかく
をて四とせくをの寶あるけの寶をてあん
えはや一の結系の所分別
但云此篇八白櫻下に誠毫の模擬にして拾二年尾の句を出シ
続り元日の句元ヨリ作者八是を四文格ト題セル誠に俳文
ノ一格なり今八歴シテ對向類に加フ去レハ白緊なの對論ヨリ
亜夫郎ノ言語を爭ヒテ四ノ左右に次新セル鏡ノ影ノ差別ハ
分明より去ルハ淫文ノ設論に勝レテ一篇二十七八箇ノ彼我

ノ二ヶ所を墨ムなモ曲折深遠ノ所ナルレ況ヤ泡影ノ論を離レテ
結文ハ我ト我心を責ムタル急に笑中ノ刀を用イテ文に虚實
ノ自在なりト称スレ但レ作者ハ濃西ノ大垣に産レテ谷氏ノ
隠士より白櫻下ノ二字ハ門下ノ称号ナリトソ

本朝文鑑卷七

辯類

居眠辯　桃化辯　仰兎辯　自得辯　梅長者辯

巴兮與技辯　招魂辯

說類

勢上人說　名力坊主說　櫻高人說　名說

名二子說　論佛說　夜話說　辻談義說

頌類

蒼耆坊頌　不懲糸頌　醋德頌

松葺頌

雜類

居眠雜

趙北枝

世ていなまなむの北枝八百ず祇むるそそうしにたむあて眠るもあるを月又寄て覚るもあるを昨よくことても眠るりめを孫と乗るゆと伺と云れ俗るとと眠るもなるとつるを北祇又祇ず獸の思祇ずるも伝むるる用あれに眠るも用あん杜毋又猫の祇むる時を輝又用あるてむるあるを北ず一て世情のるはまるとめるるぬく祇ずるやらハ西業の祇ふるてあてやるる爰のおるるる祇むけあるとあるハ

なとはるてはをふるるれも眠れるやはそとふるん
柳を手棒ておてんをるてれると秋も寄も苦祇ず
ありきり茶周る輝を有世のかるあるひて山谷る鴻へ
栄辱の中又高りるるはるを眠りて君王と駕はる
はるそ俗民とふいるるを祇むるる用あれ
いはむるも用ありとるる一祇を祇性のるるる
ん、殿皆へ祇ずくはる飲を祇むはるを模又
乗るるるるるるるて墾又りれて鼾ともかるる
一けるを山寺の児と西のるて雪原又乗はれ
るを涙のる陵る帝の膝又乗るるるも世る忘

されば百倍ならんと全体の人にあやまられて稀に俳諧の
辨加はりて唐へもはなしへおとせし

附云此辨ハ婉麗ニシテ然モ一ケ折明白なり去バ経俗ノ對ニ
俳諧ノ詞ヲ尽シ蝶鴟ノ對ニ儒者ノ腸ヲ捜(カカ)セル一篇ノ
趣意ハ此間ニ知ルベシ況ヤ倪ト云イ雪隠ト云イ言葉尽く
子陵ト云ヘル此等ハ文章ノ鼓舞ニシテ君ニモ此辨ヲ傳ヘシト
例ニ虚実ノ文鑑ト云ハン誠ニ此人ハ俳諧ニ遊テ文ニハ和云
ノ盡玄アリト称スヘシ但シ此章甚タ別意ニシテ趙子ハ彼カ標号なり

桃化辨　　蓮二房

むかしよりおほくなづくる花の名のおもふにあらでその
名と花の品をたかめとしてもたる木とわざへ書の
名とし鯉と侍てハ花の子はれ名をそてそそて見附と
言はれさるのつひあらん飛しハ吹よりて此君の
潜号と伝ふるもかりにおまへのくさりめに桃と侍すれよ
此桃と侍そけるあるハそと古文の端おあらんかむかし
西王母か桃を千年にみのり今の蓮二房か辨ハ一日
にむ伝へて桃の子ハし先尊のいふしなと侍るに
化の子をここに故隠のおほけとなふなる師文の
恩に感して永く此時を忘れさらんため

但云無雜ハ其日ノ實情ヲ實ヘテなモ雜ノ体ヲ尽セリ去レハ
此公ハ越ノ瑞泉寺ニ住シテ故院浪化公ノ風流ヲ續キ芭蕉
門ノ風雅ヲ暴イ給ヘハ白雪ニ桃青ノ桃子ヲ摘テ浪化ノ
化字ヲ揉ルトヲ然レハ王世ヲ桃ノ實ニ蓮ニヲ雜ノ花
ヲ對セル誠ニ一篇ノ奇絶ニシテ不忘ノ言ハ骨節ト
見ルヘシ但シ井波ハ其ノ郷ノ名ナリ

伯兎雜　　東花坊

越ノ天下ヒロフ石門ノ古ヒ有テ古花坊ノ
ゝんトヒロフ江國ノ眺望ヒロ通ヒ見テ其ノ
俗ヒロフ人ノ產實ヒロフ所ヒロフ
今ノ心ヒロフ人ヒロフ作兎ノ人ヒロフ
ヒロフ人ヒロフ俳ヒロフ
俗ノ雜ヒロフ林ヒロフ俗養ヒロフ
ヒロフ世ノ人ヒロフ人ヒロフ對ヒロフ
今ヒロフ人ヒロフ俗ノ人ヒロフ
ヒロフ風祈ノ國孫ヒロフ
ヒロフ最後ノ說法ヒロフ須跋陀羅
ヒロフ廉兎ノヒロフ
ヒロフ最後ノ門人ヒロフ
ヒロフ兎ノヒロフ

なきりきりにて仮のまゝ通称して今は兎の字にて弁
あるに似たのならずとも心をひいて見るすとも見ゆるまゝ
なや諸共の風雅の上達も智恵の俵にありてはそれに
秘名とされたりんハ青雲のうへもとく一丸也

汎云此弁ハ捷蹊ニシテ人ヲ誨ユルニ文アリト云ヘシ去ハ席兎ノ因縁
ハ遺教経ノ趣向ニシテ甚以人ヲ此人ニ喩ヘタル最後ノ二字ニ六好辨
ナラン況ヤ兎ノ字ヲ弁明シテ彼カ上下ニ云イ寄セタル例ニ俳諧
業務ヨリ虚實ハ一篇ノ趣意ナリ但シ天下村ハ福居ノ雪ニアリ

自得弁

北七堂

はくく四畳の的矢とおふに河豚は毒あれハ喰ハでなる
をおほくは海月ハ骨なけれど買人すくなしといふもなし
河豚は毒なくハ龍宮の制れよのきられて此里みへ
さらそでやしくはりとて海月ハ骨あらハ此等様も
かはりては多かるべし 然るハ天く人の此加減にて得失當分
とりつくものなりけりとて悉く堅なき乱れハ牙なく丸頭なれハ
寛ひろし月のあつかれかしをいふひとのおのれとするも
世をなさて 手向ふあまるふへをと孫子のまてなし種らして
本論の布子もきうしてくる美悪よなれて美悪とさつてね
なれ己を捨てく人に求むる故なり一しはれても知ゆるし

ちりあしらはれたりといふもむかし隠逸の人の渡世するにて
世にあるべきものなれども世につかへ番頭のごとく負担
冥報の園にまうでて得るものあるべしいまだ失ものあるべし
敷けば月とともに乳の色に酔うて一盃一酔
の腹が減ると本性の美の汚ちうんぬいまもしかるに
くもに月もなりしかくあるべけるかりしかくあるべきみの
もなりしかくあるものにもあれもえたりのろ
くみもなりしかくおもなりしかくなりしかくなりしかく得も
自得のなりしかくあるべし失も自得のなりしかくあるべ
行云此辯ハ莊子ノ意地ナカラ全ク俳諧ノ筆法ナリ表ハ西鶴ノ

喻ヨリ自得ノ趣意ヲ骨成ル笠師中二十二箇ノ面白ヲ用イテ
春秋ノ間三箇ノ面白ヲ要ス又三互照ノ法アリトハシ然ルニ
四季ノ詞ヲ重テ而ニハ四季ノ姿ヲ云ヘ後ニハ四季ノ情ヲ云ヘル
此等ハ文ノ一体トスルヘシ嘗テ龍宮ノ制札俳諧ノ人ノ常話
ナカラ此篇ノ間ノ奇絶トスヘシ但シ作者ハ越ノ新潟ニ任ス
北村氏ノ門人ニシテ先師毛利氏ノ称名セリ

梅長者辯

井上重平

昔早ク梅ちりてしまうて白陰ノ梅と植て梅と思
梅のもとにおりゐて雨のよりそうく梅の木

とこなもあり一世のたとあるを人のこひけりて座をあれの梅
と拾てあり世界の撰和歌のまれりとやらてやて
ぬをてて詠りあるいあるとりいさや梅と買ふて隠れと
あるんら但を梅と書てもれとふんらけらおい梅の
濃はあるを一ちて紅京をこの井をありて是一を
和名の井をよりて是一を酒たる車井あり今一を
探もり紅瓶とおろ一のそいてあるふ井筒ふれ水仙
又月とをそ人ふをふちるきのあらひも清一ふのあるを
ふに蓮とをあり詠をもを人よ池いのりて蓮のを
ふ水をを拾をこけををねの畑を嘉をいのりけ

あり加の有宗ら是見をもををををふたをこをりふの表の中を
稲荷の伝やをあるあをを言をもるけのかしを
をに離もあるを本発も叫て拾ふの拾見もをの言を
かをあるをにりをを市中を間とをををををやをを人へ
のををををんとかをを伊のをくをとをを隠ふを
あるんをもあるをあるんけらふい梅の咲叫ふる一一
仮云ふ辞ハ虚誕ナルニ似テ家居ヲ辞スルニ師ラサル所アリ
増シテ在年ノ分別ナラハ隠長ノ間ニ心ヲ留テ其家永ノ
神慮ニ任セントハ誠ニ虚實ノ自在ナルカ去ルハ和清カ伴
ヨリ漢ニハ孝叔カ愛蓮ヲ云イ倭ニハ有宗カ敏樹ヲ云ル

俗間ノ二子ハ肩尾ノ文法ニシテ文章ヲ裁ツニ口ヲ用スト
云ヘシ但シ作者ハ濃ノ岐阜ニ產ス姓ハ井上ニノ梅長貞ハ
字ハ[illegible]

巴丘與秋辨

東葦作

世秋を逝ねの言四あるべし世本氏の人此秋をあるべして
秋を病ねのちをとなりを秋と思ぐれ
あるべて逝のるおと言ふをむしろを以国を以かの
ありて風雅のんさ係うねいを秋をたとさまと
て水を百里の人をもるひ月雪むの所以も一は
も世ふるうんやあり秋を世秋ハ秋をまるめと

実の福光川のかをるをむかの面風のねるんを龍
と化しをうんをとなるを一にして世秋のもをを
をを殷の時をを殷の時をを殷一をかをを
望寒の色とを一へて世秋をなををやるの池
をを行しをなと行をををかるも係を寒をを
をのをを秋をく病ねをとをあるをを世をを
世秋をみをるりをををを世をを
のあををあんををるをを世秋の世をを一節
をるをををを世秋の世をををを青の
在云世雑ハ此体ニノ杜甫カ秋ノ意ヲ含ムカモ又章ノ

實地ナリ然ハ林ノ一子ヨリ世君ハ王子融カ愛情ヲ云イ
化龍ハ傅長房カ仙術ヲ云ヘル然寒ノ色トハ世系行
寒ヲ行ナリ去ハ巴与ハ先所ノ古内人ニシテ北越ニ風雅ノ
名ヲ知ラル今モ其林ヲ付長ニシテ其家ノ記録ニ残セリ
トソ彼カ山雪集ニモ見ヘタリ

招魂辨

人ノ魂ニアリ其一ヲ昭々靈々トシテ鏡ノ新ノ
ちりふかきごとく善ともてしら悪ともてしらるト
其二ヲ名利ノ間ニ生シ一切其ニヲ活色ノ中ニ

あるふいて世ニ名ヲ立ントテ生れてくのあとにあるも
ものを色ちりに二ヲの放埒ちり孫ニ其ニヲとかなもれい
名ヲ世ちり何のふるもの国と奪れあとをして
今ヲ世ちりまふくふるこれ例の二ヲの世ニ生ちて
名利の世ニ人とあるひ活色の市ニ称ヲとるれて
此ニ宗門性ヲ知て鄙書性ニ入ル此一切の活色て
何ニて其ニの魂ヲ中ねふて父母ヲ来の家ヲ知孫
ヲ知ル仏ニ成ニ同連の通力ヲ示ル儒門ニ宰鈴ち
雑舌ヲ作ニて其魂のあるヲ知ル顕門のあ
一ヲ引ちりて今ハ活屋ヲ仮ニ来て前陽のこ

然れども其の賢君も亡び去り、学問の程
度も衰へられて、乾坤のかなたあちこち、晋陽の朝も
日もそれにそなへて、大君の指も月をかすめ、所も
あまねく、あるかぎりもれなく、うるはしく
武陵の春よりも、美の在園とぶの
世界ありて入るもけにさもしかるべし
なれど、帯長房が、よ歳のあちこちも、劉玄石が醉
の夢ばかりにて、風雅なる仙の味ひ
有云此辨八宋玉が題を借て其詞八虚誕なれ共、似たり儒仏の
言語文字より人異の今別理屈を離れて自己を求る情

なり誠に性の昭々たる物の善悪ニかたよらぬ臣の所ニ隠れ
孟子も説残せる所ニの餘論の永の筆力より発ニ世間の君臣
八五よりか斉物の詞より出て石髓の中の君臣なるを去ル八頼川晋陽
ト八起句ニ賢君の隠れ所ヲ云イ晋陽大君八結語ニ題の招
ノ子ヲ云ハル遠く文章の互照ヲ知りて博達自在の文法ト云ヘシ
但し在中園八佐角ヲ別整なり

説類

麓上人説

東山長味

麓の跡ありのあるもなくなりぬるあるも
ひとつとしたかくらてあれとまひきりの下宮中なれ

をのれ忘れ給へるなり。祝ゝ敬ゝ心戒とす。
名とは行ふものゝ名なり。名は行ふものゝ名なり。
世ゝ人の腰折と一ゝ言ひ給へり。

夕紅ゝ色ばられ上人を
仰のそれもやまとうたを年

往古世間八峯白雲ニ在リテ爰ニ子ノ題加ノ詩ニ此老八其
世ニ名アリテ大名ノ隠者ノ先賢ト仰ケリ。ひも詩ヲノ達人
ニシテ世業ノ盧實ニキモ遊ヘリトフ

名小坂主ニ詠

應浪化

海を満足ら海ら牧のあるふるまの島と砌て山川
風の波とむくゝゝ一ばれてあるとおとてあるき
おとむら自無ゝむきるるなるあんら世ゆゝ海と
ばらふまく狙ら猿と養ふまるゝ笑と仮らん
いみての和と仮あゝ美帯とられいまものゝと掃くゝも
ゝを竹田ら人形ふんも土計のあるらあるゝを
ばらや海ら弧の漫ゝるて陽も漱もられられ
なの鉢をと躰とふゝなの静ふると用とら唐ら西
も美ニおめてゝと参ふゝふふゝゝゝいまむ行
工語ゝられて自慢の慢の墨やゝるゝ饅頭の

饅の丈やくふてる但を備足の二字をとりて佐う乳の
一方福と称を佐うんをそなと備足をかう〳〵
但云此説八備足ニ子ヲウステ小姑主ノ名トナセル去ハ備足ナト
呼カケテ二蘇先カ説ノ佐子ヨリ一篇ニ二つ子ノ佐ヲ用ルニ
文章ノ意地八各別ニシテ此等ヲ換骨法トモハン誠ニ詮凡ノ喻ヨリ
但云カ猿ハ朝ニ暮ヲ云ク居氏カ硯ハ利鈍ヲ云ハル竹田ハ俳諧ノ
筆格ナリ但シ此云越ノ端泉ニ住シテ應山人ハ標号ナリトフ

櫻商人説

禾子

年をえ祿の幸已ふん東西お話の選擇ハ浪華の名花

ものうと悔こて佐とそて此年こて此お話佐くるよ年を
北章坊の名とかんて安宅の関と越んとをうの俳
勸進帳の詞とはくるよ詞
・此字中をてふあのこを當國山松の風雅人をて
蕉門の心をあるをとをて主をよを西お話の新
ををうれてをなの丹金とをお坊ををけくに
桜山坊の芝とかして櫻商人の旦那やをと
をむ拜とをれい字中をつひるとをれ
ふむ坊をてをの章のををもへ俊の行者
の高木履をもをして関の人くをゆし

久頭中さゝかけの俳諧 　　林料〳〵

子付と聞きて俳諧うつよの膳をふと〳〵四ツ子柳出仕
い先根の五克井と海鼠ふあり子柳の手作と父の
旅をしらなの名と人も呼作〳〵うゝを今此柳高人
そ高と寄きる柳人ふゝや柳とあきふふ高人ふゝや
俳諧の餅をとかくうけふとうはれと柳を作ぬの
縁あれとなこの山仮もこて此高人も作のてよと看仕
きて一〳〵此俳の諧とかもゝれて関のくゝ〳〵頭と
　　仁云此説ハ説ノ的面ニシテ虛誑ニ人ヲ論被ストニシレ云レハ
五克井ノ縉餞別トハ先師北國ノ肩逢ニ許ニ亭ノ種稼トテ

野后山橋ノ旅姿ヲ縉ヤキ一軸ノ巻物トナセル撰ニ仮トハ
其ヒヲ題号ヒ然ルヲ此題ノ名ニ寄セテ行名ノ手續
ニハ俳格ヲ顕ハシ作ノ一ヒニハ説体ヲ尽セル誠ニ文章ノ
棧鋒ヲ得テ北陸ニ此作有リト称スベシ但シ其姓未ダ
ニシテ北花坊ハ其号ノ假名トフ

名説

渡部犯

芳ちちる武士と九名あり今ちある居名と十名あり
て五ちあちふ柳ハ東華坊とつい西ちあちふ柳ハ西華坊と
ちふ華ちちと先ち華ちと説ちふ訳とふ行

たゝよ云ふのゆゑなめひ問ふるの雪とゝる奇くのむ
あゝ伝うり或を一方さとも饅丁とも羅しをたの
孫とかゝをりいたあゝ書とゝんい葉表人をと
あるゝをこゝけい是御序あゝむまていれ用と
くたゝあゝて野ゝ落ゝ時い郡盤おいいあゝ
時い御ゝ庵とゝ実をゝふの一支ちゝて
ゝ家の行名ゝ教とゝゝさゝもたゝの時の用
ありてゝゝと實地ゝゝゝゝゝゝゝ
然名の其物ゝゝゝゝゝ而ゝゝ釈也
ゝけく九行ゝとまゝ教たたてゝ

遍照僧正ゝゝ花あゝ雪苔
の色も黒ゝれいけのむも雪のむも物ゝ慨ゝも
いひかゝゝゝゝに御御のゝんをゝとゝをの教
ゝんゝゝ九應分いゝゝゝゝ化物のゝゝゝゝゝ
但云所說ハ須摩ニシテ彼ニ花蕊ハ各ノ四十名トハ
云イヤチナラン然ルニ御諧ノ字訓トハ指シテ華ト花トノ
字論ニモアラテ和音ト御諧トノ別象ヲ云ル賞ノ心ニ
時烏ノ事モ其ニ云ノ家ノ花ニ寄セテ例ニ我家ノ文
法ヲ例ニ我家ノ意地ナラン故モ此名ノ数多ナル中ニモ
葦表人ハ丁今ト再生ヲ合ニ羅乙ハ彼ヲ踊ヲ隠セルトハ

若ニ掛ケテ霜ル其角ノ收容ヨリ事業ノ故アルモ故サキモ總テ
い其時ノ應用ナラン老ハ儒仏ノ二教ヨリ和漢ニ詩ヲ作ノ人オ
ヲ一テ万物万像ヲ此間ニ置ケル天ノ間約ヲ称スベシ但シ定家
ハ色黒ク顔ニ皺ノ跡アリトハ老人ニ續ケタル一説ニメ雪若ハ
能登ノ産物ヤリ然レハ一ツ扁結詰トメ化物ノ世ニ近レトハ
此等ヲ説ノ文鑑ト見テ畫賣ハ信理ニ會取スベシ

名二ヨ説　本鷺助

むしろ蘇老泉ヲ始めとして軾とい轍といふ父子の
一ことにとられるもいと高く重もとうとうる所とすて

も物ちの子にんとは世けて病床のんとなくにもむかりてこ
ちの見と爲虎ちてふい所なの猛氣をめるいて
百歳のおそれとそふあるて仲ら牧のおろうして
世のやうもんよい生れと亂ノ虎の威とかてとつる
世俗の號ノふたふるふんちふい虎のあるの祈あるを
祈ふるの虎ちて用ゆる時に虎ふる用ひる時い
亂ノふんて新ちて用ひたのよう威者とはさんやうて
富きともふると貧賤ちふると思ふるも
ちる新のようちふる遺金ふれんもはてこの事と言祝
ふい世ちいきちいるくて能ちのわれ事能ちふれ

いそくよ歳のこゝろおもむきのこゝろちよそくしこん袖にかゝり
の色まえてちちれんとし誠にあひにしとのゝみのに浮世
子とひろう文字うらとして稀ならめと嵐に眼くらして
子とひろ目鏡（メガネ）もみられてやそゝしるといふれまくまた
にまてかれくるりさく虫の精気とみらんとせ

但云世説ハ蘇文カ趣ニ意ヲ借テ別ニ俳諧ノ筆格ヲナセリ然ルニ
見ノ歳ヲ假ル事ハ史記ニハ孤ノ古文ナルヲ東方朔カ客難ノ
詞ヲ合セテ兎園ノ二字ニ用イナセルモ双関ノ法ニテ古意
ヲ用ユルノ文錦ナラン況ヤ爲字ノ倭文ナルサヤ 或ハ遺金ノ
二字ヲ云ヘル我子ニ百両ノ金ヲ遺サンヨリモ一巻ノ書ヲ教ンニト

昔モ韋丞相ノ庭訓ナリ 然レハ一巻ノ結語ニハ子ヲ見ル眼鏡
ノ庭訓ヲ以テ題ノ意ヲ尽シセリト云ヘシ 但シ作者ハ木村氏ニシテ
攝ノ伊丹ニ住ス當時ニ滑稽ノ風人ナリ

論ス師ノ説ヲ

西華坊

今の俳諧ニ師弟子とてさく人ハ韓愈か師説あり師あつてこそ
あらて俳諧ハさもしといひからうて師と弟もまよひつゝて
さるを五七の俳諧とおもて俳諧の名をとまるく人も
たゞ俳諧の名とよそ遠く世界の理屈にかれ
て近く俳諧の名ほてあるよひしもり滑稽の宗風

うて所の男より他なる一脈やされて韓命の所說い
道と先進の論あれて所所を男よりと及ぶ〳〵て
その及とあて〳〵りとれとあり今の俗諺所のことら
ものかこさとこちひて男よりてこの所やされ
てつて所をおろかあんととゆよりこ
かんとういはさせと義醫者の男よりも針灸と
あひ免元と貴て比ぶ年うて安和と及ぶと今
の俗諺の眼ちい蒼蠅を扁鵲ら所のかとんてら
以宜及この大根の所のの如とあるよりこの所の
物の言似ちあるよりの物ちうれあるへしその醫者

そ〳〵学を虞ら孫と二疾氣ともあるうはは
況や大工不換の男よりもはなはだ
むし韓命の恥の二ふもとゆやむはは
はるもも俗諺のりはふとあるれを所及いきかくの
ことふはしはるい野田氏のよと相邑とふ右はら荒
俗說のんと俗て俗諺の所を求むへく求むへうを
のを及とをるむ

行之所以偏八是之力師說ヲ論スルニ全ク偏ニ彼カ通具ラ
以テ用ル所ノ各別ナル彼ハ巫醫ヲ引テ儒法ヨリ歸レメ
彼ハ巫醫ニ喻ヘテ脈譜ヨリ尊トム実ニ條文ノ体ヲ失ヒ実ニ

論孟ノ題意ヲ尽セリ誠ニ世界ノ理屈ヲ離レテ能諸ノ道理
ニ達フトハ蕉門ノ以心傳心ニシテ史記ノ滑稽毛世語ニ者破
スヘシ然ラハ此説ニ尿腸ヲ洗テ理屈ハ如何ニ道理ハ如何ニ
物ニ通理ノ無ランヤト讀者ハ爰ニ往返スヘシ全ク能諸ノ関
鍵ナリ但シ拙邑ハ備ノ倉敷ニ産テ露堂子カ嫡男ナリ

雷呂利

夜話説

左国秀吉公ある和のに和語ヲ天下ヲおさめ給ふ
ものを作ある中ヲ作られ之おれ和語
さ和ヲふしとものくヒとうを知ふヒとう

上和ヲとおかやをさをおいあり作おをけ作おをおを
をふういうをあれを上和い山を山路をあるを
仕らねをはをくしふるをしるよおのちひを
ふられをかも氣をあ作ふをおをとものを和の
ゆをけもふく用おもふく知をとはをおを和
とををを人をふを和の氣をあをいを和のをと
ッヒ仕をふをはをふを災弟をあひ男とをを
おをもちひをまをヒをを国ヒ災をを行ひをく
も感をくれ

和云此夜話ハ或人ノ屑傳ヘシヲ災ニ説ノ一ヲ加フ去レハ

大高ノ一向ハ天下ニ我一人ナラテハ人ノ恐ルヘキ有ナシト諸人
ニ云ハスキ釣詰ナルヲ輕薄ノ佞臣トモノ案ニ落タルハ
口惜シ去ト雷呂利カ答詰ニテ一座心ヲ轉換セル禪家
ニ向者ノ活法ト云ヘシ誠ニ史記ノ滑稽傳ニ東方朔牧皐
ナト武帝ニ答ヘタル夜話ニシテ全ク他諧ノ道ヲ論ハ国君
ヲ恐ルヽハ世界ノ理屈ニシテ国君ヲ心安シトハ他諧ノ道理
總テハ他諧ノミナラス文鑑一部ノ道理トテモ此等ノ風雅ヲ
ホフヘシ

辻談義話

露五郎兵衛

ならく河彌陀佛と唱ふるは如来ハ五劫の間思惟
ふされ上ニ一人ならぬ下の俗なと姉ことはてすくし
るんとの法誓ハいとものくや神おはてあんだらを
ゝさてするあるとやゝ故ハ阿陀如来ハ森ふるすを
はてとあて法くよ兵のふるもふく十万里あるゝの
西方ちこなとの方ハ伸あるて諸人の地獄とはくるゝと
ハんてハをあくとるゝ云ふ事ハ持国多門
ゝ以ハ一騎當千の四天王ハ作ふれ地獄とはふて
ふおをふいゝ高ゝをゝいてゝをれハ芝居一部ハ
ゝ鄭ゝ感をゝりめをふゝりをり
但云ふ者ハ唐洛ニ名ヲ知テ洛陽ノ仏支条礼ニ彼妻之居

ヲ張サルカ又ナレ世ニ云フ辻嘶ノ元祖ナリト昔シ祖翁ハ世有ノ名ヲ
絶シテ雷路ノ子ニハ新古ノ捌アラント可笑シトリ ハヘリトヤ然レハ
曾呂利カ夜語ノ読ハ俳諧ノ家風ヲ顧ハシ侍臣ノ教ニ第ナラン
二世一世幕ハ亟ニ盃ニ似タリト祖翁ノ一語ニ縁ヲ結ヒ杜五郎
カ名ノ古ニ残リテ古今ノ文章ノ列ニ入リ名誉ニ任ニ
鑄語ニカヲ一致ニ尽ス心徳ナルヘシ

素龍清書物語　二条堂

むしろ書きのひの解たらて文をそのゐたいき
ち祝ことをしひ孫のむもはらに色をそしーアほん

よりあるこあるこ文をふの色をそしーいかのひ
書をたりてゆとふふをたくんうあいそれ武士
の常和ーてあを系の男かくるもわるんはを
を祖をゆの春も祝系の俳諧の祝をうーわを
たをゆの汁のあやをさうもををーー山室(ハナヒ)のかをれ
色ーるををに俳諧のをもゆをを書ゆのを
あをを儒仰一世の風味をうるんをををの頃を
ハハ白武を文集をををのむを祝ーをゆをを
をの文を祝をはれを祝あの文人をハををれ
をををるれを書をゆの文ハるををやんをるを西リ

のこれるは秀能衛か此をのみしその名をこの世の撰集にいられ
たとへよみてみたりゆかれしや　これらは荘子わし
の寓言に似たれとも今此風雅の道をつたへとゞめんとせしも
藤吉郎の譜下に一将とかそへ十万との勇ありしや
鐙の袖もゆくゆくも鎧を棄して陸奥の三郎
も唐李の人たも栗林薑（かりはしかく）と二ふよてるけなり大旅
の下ゐとよ御あるらも西吹の類をみてかくなりも
もそしく　伊吹は山おほしの竈をもくてみをかくて
あるとは海苔（のり）とゆふ物の能登の国よつくりのつひ
伊勢の国まてのりとつたひその国くの海苔はあれ

そこと云時のうよあつねはあるなさ時も時の上
宣に筆（ヒトモヒ）ことかは陸氏の子孫たりもあつ林九個の威権
をそうれてあれのそのみよそらりま人はあさつき
ともかりきとみてこ秋をとりあるも四筆よおろく の
みをかつれも表もあるとうこそかの物にあ
のひあつれは之末の四ヶよ一本とかきて語ちとの人と
その意をみもてしかてれ陸よ三尾の名とかくしてその
二子も卅冠（サツカツ）よ軍とかきり陳よ行けるの群臣をはへさこ
て漢の高祖の文武をもおほへねて韓も陸様よ頑よ
おもひて今にきる吉郎の臣とたちありや

往〻冊頌ハ此体ナリ夫ル文武ノ両道ヲ云イテ風雅ノ剛柔ニ
比セルナラン然ルニ此作者ハ花鳥ニ吟ズト云ヘル集ニ蒿吉ノ
花ノ解ヲ作リ今又ニ冊頌アリテ妙ハ一ナラヲ兼ルト云フヨリ
武ワニ文道ノ趣ヲ発ナセリ或ハ西行ノ蒿吉ノ辞トハ冊僧
ノ和哥ノ謡ハサルヲ云イテ鴫立哥ノ撰レサル併ナリ或ハ筆ノ
主ハ五辛ノ惣名ナカラ草冠ノ字訓ハ名言ニメ源氏ニ
梵語ハ和漢ノ奇對ナラン或ハ陸様カ功臣ノ頌ニモ文武ノ二
字ヲ云ヘルヨリ今又ニモ蒿吉ノ花無ヲ称ス冊字ヲ托物
比興トム云イテ畫賛ノ文題ニ看ルヘキナリ但シ作者ハ
武門ノ名ヲ隠メ濃ガ山陰ニ嘉遁ス二竹ハ冊僧ノ吾士号トク

不懲京頌

木林百丸

逢てはる居士の鸕鷀杓鸚鵡盃をはよの祭とわり
そのわれ對するの人なりとし尾尾のなりし りそれ
こゝにこれを得る心ともてんてあそぶるより祭の三月園に
よう行る一しかの葉を業舞にてあそびぬるし風情あと
ようこんいくけくの月とうちあいくはくのひとやはさて
そのなれならひ義あるをもやはらし酒の徒へ丈人先生
の頌とありし廬山の雨の讃をくとりくゝて鄙国
此風流とゆかて酒く杯盃のたあるてきこうつかれおもて

あんらすれあるをこしらへてはるとしてその原に臍脂坡
とをそあきれ〳〵世こ居れるふるとやとれ下居と
思んて和漢に辞つる人と故のこと〳〵鈔のこと〳〵ひとし
能遠餘爾に世と使〳〵ゆ〳〵こうこうれ〳〵とそれ
とも〳〵人と居〳〵て或らてることなるやこの居ひて
〳〵こう人あんそこ多とそれあとまふやこひあり
ともこ罪をこんこ居てこれて行て居をの科と
やあんこ居居たれ居りをこる人の
人〳〵仏をこのそれ〳〵むこるとれこあれて人こあを
花とやこあひ言とやこもひてをの花とかこらて

とあつ〳〵十四こ詩こ詩こ文あこ〳〵和居の風こ〳〵て
たの人と接こむこ〳〵こ〳〵居居の居こ接こ〳〵てたる
已と居とむこ〳〵世こ病こ〳〵を茶碗居の居も居
おあこをこ〳〵あこ〳〵こ旅こ〳〵あれこ惟の居こ〳〵こ〳〵
百こ〳〵居居のかこ〳〵ひとこ〳〵こ〳〵一筆百里のんこ〳〵こ〳〵こあ
つ居こ〳〵れこ〳〵（付世い）金鶏世こ〳〵居こ〳〵こ〳〵とあて居
てこ〳〵こ〳〵居居花居こ〳〵こ〳〵こ〳〵

いまゝの跡のくゝ北かゝ論りと[illegible]
の拍しふゝと全公園の例も高ぶかゝと爲て北
却とつひその酒と云ふ[illegible]の糟と丘
うして高くのちゝて紀藤叡のこゝとと[illegible]
屋くいりてて祢宮城のうゝいとゆつゝ宮工
以盃のこうを[illegible]ふゝんゝ園雖の酒ゝ家ゝとゝうて
そのんの[illegible]ゝ故ふゝ

仮名世説ハ不根ノ持論ニ依テ全ク漢ニ酒色ノ中庸ヲ説クル
誠ニ滑稽ニ詞解ヨウラン但シ世名ハ和名ヨリ出テ物懲
トシテ文ヨリ然レハ世詞ノ艶美ニ流レテ俳諧ノ家ニハ好ム

ニシキニウ盃ノ名ニ附クハ屈龍ニホラクケルヤ如ク盃ニ其ノ影ヲ
移シテ文章ノ処活モ物名ノ好雅モ世等ヲ文錦ニウンキ
ヨリ総テ一篇ノ故文古語ハ字面ニ斬ル家ヲ入レシ委曲ニ
解スルニ星ヲ尽サス

醋徳頌

高九朝

醋とむし誰ゝ[illegible]ゝ[illegible]
てそれと拍ゝ人もあんゝ醋そし性の[illegible]
しかゝそや其のゝ[illegible]の[illegible]
の用とゝ[illegible]冬の[illegible]

ものゝ角とゝのゆゝうんさゝとゝれの温ゆゝうゝ浴く
すゝゝゝられて遊すの肥ゝうゝゝ中ゝの泉とゝまゝうれ
ゆ姉のゝゝうゝゝ梅津のまゝとまゝひゝうゝゝまゝたゝの
のまゝてゝうゝゝうゝゝゝゝ産屋の炭のゝゝゝゝゝゝゝゝと
ゝゝうゝて人炎附すゝゝゝゝ泉とあゝゝふゝ浴の鹽ゝ
色とあゝゝ酷貝の四ゝゝゝとゝゝゝゝゝ塗の見れ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

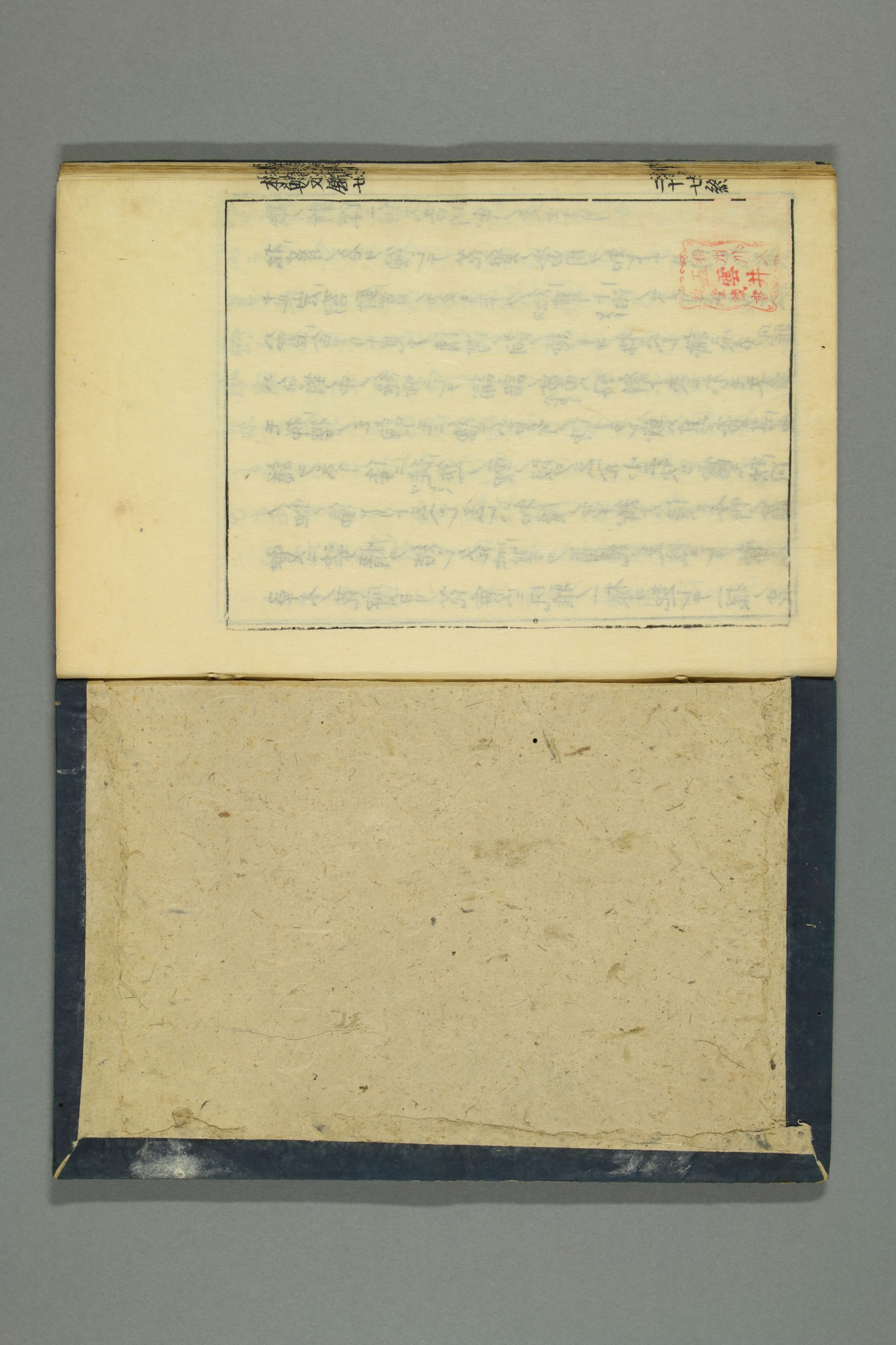
短句モ慮外ノ音トハ隠見ノ法ニシテ總テ俳諧ノ筆格ナルヤ
去ルヲナトモ見ツ田カトハ弁書ノ詞ヲ借ナカラ賀之助ヲナト
見損シメルカモ一篇ノ肯尾シテ如モ一篇ノ名言トスヘシ
但シ作者ハ越ノ系魚川ニ住ス高野氏ノ俳士ナリ

松茸頌

川豆一郎

世ニ宝ノ物ハ有テ素ヨリ其ノ実ヲ秘
秘ルヲ其ノ人トモ為レ実ヲ隠ルヲ為
ル和漢ノ詩ハ其ノ物ヲ賞ルト為ル雅
ル人ノ作ラ云ヘモ言ヲ省テ不

知ラ言ヲ為ルヘシ本モ有ルヒ物ヲ求ルヲ其ノ実ヲ
ヨ小ヲ秋ノ月ハ此ノ天ノ下ニ人ハ皆ノ月ヲ
面トシテ眺ル山ノ中ニ人ハ皆ノ月ヲ和漢
ノ詩ハ此ノ中宮ノ如ク人モ知ラ
いうる程とやうてや和漢ノ詩ハ
ちらて浮世の遊楽とは此ノ秋ノ月ヲ賞
ルヲ其ノ名ヲ雲ノ白クれハ久米仙人の脛とふれり
人のあこれていいうる車とうちはさうる驚と
かくむくらに天の生質ある一ツ下脚

のてとかふつてもちゆ世とおそうあたけの
おこれる世とあるとあるとは日のそらかとも蒸れ菖蒲と
とそ和て夏の哀云の響應もちまの飯と
酢とあるとも云とは云てとそ和ある人一あるい
風閑のよ世ゆとかこまりあるなに魚町の八百屋と
森うれくへ今と西鳴の遊ゆとあるひ東園の蓮童
ままりて吸物の中に色もきるいて云とある
ものもあるてそうあるとは風流のそのあるへ一
扨云所頃八湖体ナカラ始ヘ義人富屋ニ寄セテ清閑
ノ二子ニ轉極ヲセシヨリ終ハ聖人ノ行藏ニ喻フ況ヤ

草木ノ花實ヨリ花實ニ風雅ノ一様ヲ起シテ一様ノ花
實ニ姿情ヲ結シタル此等ヲ首尾ノ文法ニシテ常山
ノ蛇ノ働アリト云ヘシ去レハ和漢ノ章紙ト八漢三本州ノ角
譜ヲ云イ侍ニ徒然ノ理ノ段ヲ云ヘル小二秋カ露モ秋風
モ柳櫻ノ三詞トモニ總テハ古今ノ伊ナラン或ハ其ヲ香ニ其色
ハ句對ノ中ノ絶妙ニシテ論語ノ蕾ハ好辭ト云ヘレカモ文章
ハ置合ナリト見テ清閑ノ詞ノ續キヲ称スヘシ誠ニ此名ノ風雅
ナル岩窓針菖ノカタミモナク紅葉ト治ノヌメリモナキヲ宮人
松菖ノ名ヲ頌シテ花實ノ當用ヲ知レトナリ但シ作者
越ノ新深ニ住スト吉川氏ノ文士ナリ